

日本が産業革命をした明治初期、交通網の整備や鉄道の発達には、時の政府の急務の課題でした。千葉県内でも同じような、鉄道の必要性が高まりをみせる明治20年代以降、幹線鉄道が整備しかかるその折りに、軽便鉄道の構想は生まれました。



鉄道連隊による軽便鉄道の敷設演習  
(写真：稲野辺 実氏所蔵)

鉄道連隊の演習の名目により敷設された軽便路線。1本の軌道（レール）は5メートルで枕木は鉄製。習熟すると150メートル当たり5分で敷設出来たとされる。正に軽便の名の由来そのままである。

### 開通の影に

#### 一人の男ありき

〔人と理想と現実と〕

「千葉県の鉄道網の発展。そして全国で初めての県営鉄道を！」

第11代千葉県知事、有吉忠一は明治41年の就任当初より、鉄道整備に情熱を燃やしていました。彼自身の理想とは、県内の都市間の連絡や交通の便を良くすること、そして産業の発展でした。

また、土壌の悪い果道の築造や維持がとても困難なために、大量輸送可能な鉄道は他県よりも切実だと述べていたそうです。

有吉の理想が現実のものになるのに、欠かせなかつた車両やレール。それは、皮肉なことに明治37年に起こった日露戦争と密接な関係があります。俗説では現在でも、そのときの「戦利品」と言われていますが・・・しかし。

### 眠れる列車が 目を覚ます

〔本線の開通〕

明治41年に新設された、千葉町と津田

沼町の鉄道連隊（陸軍の鉄道敷設部隊）には、軍が日露戦争での諸権益を守るために、ドイツから輸入した機関車や貨物車、そのほかレールなどが新品同様で保管されていました。

有吉はその眠れる車両を使うことで、県営軽便鉄道を開通させようと考え、鉄道敷設軍事演習の名目で立案。軍も車両の有効活用という点で意見の合意を見、明治43年に工事が進められました。

折しも同年は、軽便鉄道法が政府により公布された年。また、補助金交付などについて定めた、翌年の軽便鉄道補助法は、全国的な軽便鉄道の敷設ブームの引き金にもなったのです。

時代の風が計画の追い風となつてか、明治44年7月1日に本線の成田―三里塚間が開通。同年10月5日には、三里塚―多古間も開通しました。時の知事は有吉から次の告森良へと代っています。

県営軽便鉄道の当初の計画は千葉―木更津間でした。しかし、この路線は国営鉄道となつたため、次に検討されたいくつかの案の一つとして、成田―三里塚間が開通した経緯があります。

ここに軽便鉄道多古線は、全国初の県営線となつたわけですが、車両施設などは軍からの借り物という点で、機関手は鉄道連隊の兵士、車掌や駅員は県の職員という、独特の経営をみることになりました。



第11代知事  
有吉 忠一

（任期：明治41年3月28日～43年6月14日）  
県営軽便鉄道の建設を立案し、国営鉄道の走らない地域の開発を図った。

明治37	日露戦争勃発。軍が軽便鉄道の諸施設をドイツより輸入する。
明治41	有吉忠一が第11代の県知事に就任。県営軽便鉄道の構想を胸に抱く。
明治43	軽便鉄道法の公布（地方鉄道の普及、交通網の拡大を目的） 千葉県が軽便鉄道の工事を着手（陸軍鉄道連隊による敷設）
明治44	県営軽便鉄道本線開通。全国初の県営鉄道となる（成田―三里塚間9・7キロ／三里塚貨物支線0・5キロ）〔7・1〕 本線を三里塚から多古まで13・8キロ延長する〔10・5〕 八街支線の開通。富里村に初めての鉄道が敷設される〔5・18〕
大正3	軽便鉄道の陸軍からの借用期限満了。折原県知事が政府から、軽便鉄道の無償交付を受ける。
大正4	本線を多古から八日市場まで9・3キロ延長する。
大正6	開通当初から赤字続きで、この年、県から成田電気軌道へ払い下げとなる〔4・1〕
大正15	成田電気軌道が成田鉄道と改称し、経営の再建にかかる〔5・13〕
昭和2	本線のレールの幅を600ミリから1067ミリに改修し、省線（国鉄）が乗り入れられるようにするが、支線は改修されず〔9・25〕
昭和3	軽便鉄道の最盛期。花見列車が多くの観覧客を運ぶ。遠くは上野や両国からも八街支線の営業停止。富里村、八街町の地に飛行場が建設され、路線が敷地に架かつたため。しかし、実際には昭和15年3月ころまで運行される。
昭和6	戦時下に「不用品の鉄道」として全線が廃止される〔1・10〕
昭和14	
昭和19	

## 軽便歴史年表

（一内は月日）

# 今昔軽便路線図

- ① 三里塚駅機庫近くの車両とレール群  
(写真：白土真夫氏所蔵)
- ② 根木名停車場
- ③ 川津場停車場
- ④ 富里駅
- ⑤ 高野停車場は、現在の南小学校のプールわきから小野田商店辺り。現在は千葉交通のバス路線になっている
- ⑥ 畑のかど辺りが十倉停車場。左に見える道路が軽便路線
- ⑦ 子供たちの座るベンチの右を行くと、実の口駅がある。富里診療所の立て札が見える  
(写真：塩野谷久子氏所蔵)
- ⑧ 八街街道停車場
- ⑨ 古込停車場
- ⑩ 東八街停車場
- ⑪ 八街駅 写真左側奥が軽便鉄道のホーム  
(写真：八街市郷土史料館所蔵)



※ 軽便列車が通れるように切り崩された土手。幅は3メートルくらい。現在、富里町に残る数少ない軽便鉄道の面影である。



— 八街支線  
— 多古線 (本線)

支線の総距離は13.8キロ。開通当初は①④⑦⑪の4つの有人駅で、残りは、昭和5年以降、利便性を図る目的で無人の停車場を設けた。機関車は発車・停車が容易でなかったが、ガソリンカーである気動車はそれが可能であったため、駅を増やすことが出来たとされる。なお、本線の駅名は、成田—西成田—東成田—法華塚—三里塚—千代田—五辻—飯笥—袋井—多古—下総吉田—豊栄—西八日市場—八日市場で総距離34.2キロ。



軽便鉄道  
特集 幻のポッポ

# 鉄道ノ必要他県ヨリモ切ナルモノアリ

有吉忠一、軽便鉄道立案時の様子 日本鉄道史より引用

## 富里村に

### 初の鉄道が開通

#### 【八街支線】

大正3年5月18日、富里村を縦断するように、初の鉄道が開通しました。多古線の支線として、三里塚―八街間の13・8キロの単線。

開通当初、富里にあったのは「富里」と「実の口」の二つの有人駅で、無人の根本名停車場は地名こそ富里の名残ですが、実際には成田市の駒井野にあたります。

#### 【日本最小 超鈍行列車】

本線、支線ともに軌道は600ミリで、これは全国に90以上あった軽便鉄道の中で、最も狭いものでした。そのため馬力も速度もなく、三里塚―多古間は2時間30分、三里塚―八街間では60分もかかっていました。

計算上では、時速10キロにも満たないこの超鈍行列車は、緩い坂道を登るのにも一苦労で、乗客に後ろから押してもらおうという、のどかな光景も見られたと聞きます。

#### 【偶然か必然か】

前述のように、軽便鉄道八街支線は本線同様に、鉄道連隊の演習により敷設されたものです。大正2年9月の、八街・富里地域で行われた大演習時の軌道を、

そのまま利用した経緯があります。

近隣の町に比べ、お世辞にも発展していたとは言えない富里村に、鉄道を引くメリットは皆無といってもよかったです。

しかし、現実に鉄道が敷設されたのは、村が御料牧場という広大な国営地の敷地であったことが起因し、鉄道用地の取得にはかえって好都合であったともいえませんでした。

また、軽便鉄道は全線で48キロ。陸軍一個連隊の敷設しうる鉄道路線は約45キロが限界とのこと。演習はこの距離を目標に行われたとされ、村に支線が開通したのも、県北部の開発という理想とともに、偶然とも必然ともいえる出来ごとであったようです。

## 県営から

### 民間への払い下げに

#### 【赤字路線】

人々の期待を背負って開通した軽便鉄道ですが、当初の思惑とはうらはらに、経営は赤字続きでした。

県議会でも路線の「廃止か存続か」で議論がされてきましたが、地方開発という立案当初の目的と、自治体の立場上、赤字というだけですぐに廃止することも出来ないという理由で、路線の存続が決定しました。

#### 【譲渡】

しかし、明治43年以来17年間県が営業を続けた軽便鉄道も、ついに、昭和2年4月1日に当時のお金140万円で、成田電気軌道株式会社に譲渡されることになりました。

県は同線の建設費に167万余円を徴していたとされ、ある県会議員は、「県政の痛は見事に切開された」と、述べたと言われています。

#### 【新生 成田鉄道へ】

成田電気軌道株式会社は昭和3年5月13日に、社名を成田鉄道株式会社に変更し、運転回数を増やしたり、客車をガソリンカー（気動車）に切り替えたりし所要時間の短縮に努め、また、同年4月から9月までに、レールの幅を600ミリから1067ミリに改修。これは国鉄の車両がそのまま直通出来るようにしたもので、そのおかげで春の桜見の季節には上野や両国からも、見物客が大勢三里塚に集まりました。県営から民間への譲渡は、経営の改善とともに、確かな業績を伸ばしていったことも事実のようです。

しかし、八街支線が改修されることなく、レールの幅は依然600ミリのままでした。それはまさに、軽便鉄道八街支線が、日本で最後の600ミリの軌道で、かつ最小の軽便列車になった瞬間でもあったのでした。



## 軽便鉄道 特集 幻のポツポ

中央には「県き章」が見られるように、県営時代の車両。種別としては2軸ボギー2・3等車コロハ1と推定。ちなみに、大正15年の旅客運賃表によると、2等は3等の7割5分増の運賃で、4歳未満は無賃。4歳以上12歳未満は正規の半額の運賃であった。



県営軽便旅客車両  
(写真：塩野谷久子氏所蔵)